南相馬市を中心に 摂食嚥下ケア講習会

被災地の口腔ケア 決め手は地元との連携

原発から北に約二十五kmにある南相馬市は、震災直後は自主避難する市民が多く、「災害弱者」である高齢者が取り残される状況でした。福島県からの要請を受け、長崎県医師会、長崎大学病院の医科と歯科の混成医療チームが継続的に医療支援に入りました。この南相馬市との関係は今も続いており、南相馬市立総合病院には、長崎大学病院から年に数名の研修医が派遣され、仮設住宅での予防接種などを行っています。

このエリアで行われている、長崎大学歯学部と地元保健福祉事務所の連携による口腔ケアと嚥下（えんげ）ケアの支援事業の取り組みをご紹介しましょう。長崎大学歯学部口腔保健学分野の小山善哉助教に聞きました。

「震災後一ヵ月の南相馬では、原発事故で避難していた地元の相馬歯科医師会の先生方が三分の一ほど戻って医院を再開されていました。そこで、歯科医師会に呼びかけて連携協議会を開き、保健センターが間に入って患者さんの情報を共有する仕組みを作りました。これがうまくいきましたね。歯科衛生士の口腔ケア巡回は続けられ、数ヵ月経って、今度は飲み込みの調子が悪い、つまり摂食嚥下の問題が表面化してきました。高齢になり、喉の動きが鈍くなると液体は気管に入りやすくなります。私は専門でもあったし、ちょうど国立大学協会の震災復興支援事業が活用できそうですよ、と地域に提案してみると、それはぜひ！と」。

共同で事業を進めている相双保健福祉事務所の歯科衛生士である玉川春美さんのお話です。

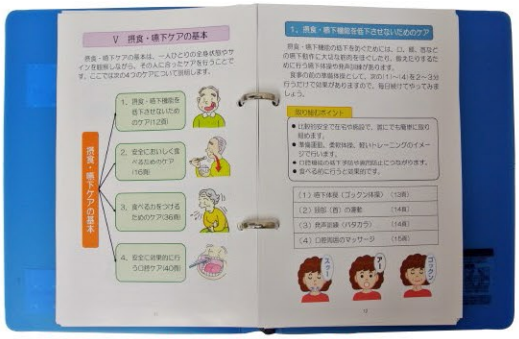
「当地域には何団体かの医療支援が入ってきましたが、支援する側と受け入れる側のニーズにギャップが生じることもありました。長崎チームは、まず地元の意向や要望を聞いて一緒に考え対応してくださいました。仮設住宅入居者の健康状態を確認していくなかで、摂食嚥下の問題が表面化し、なかには、口腔機能の低下から薬も飲み込めないといった方も。要介護者の増加も懸念されましたが、当地域には摂食嚥下障害の専門家がほとんどいません。そこで小山先生にご相談して、まずは介護職など現場の方々に研修をしていただき、その内容をもとに地元で支援者向けのハンドブックを作成しました」。

講習会も実習形式。その後、地元の講師が実践講習会を開催できるまでになり、ハンドブックも効果的に活用されました。相双地区は、南相馬市をはじめ二市七町三村の広いエリアですが、その全域で嚥下ケアの講習会が行われ、さらに、いわき市まで。つまり福島県の太平洋側「浜通り」全体に行きわたりつつあります。

今は、活動や治療の成果を検証するためのアンケート調査をして今後の動きにつなげていくのだそうです。

仮設住宅の集会場で、模型を使い"嚥下のしくみ"を説明する地元支援者

「今回の成功は、南相馬の人たち、なかでもハートのあるチームリーダーの玉川さんたちに出会えたことが大きい。地元との連携やコミュニケーションは何より大切です」と小山先生。



ハンドブックは一般の人でも理解しやすいよう図やイラストを多用。専門用語を極力廃し、バインダー綴じで増ページやコピーがしやすい工夫が施されています。